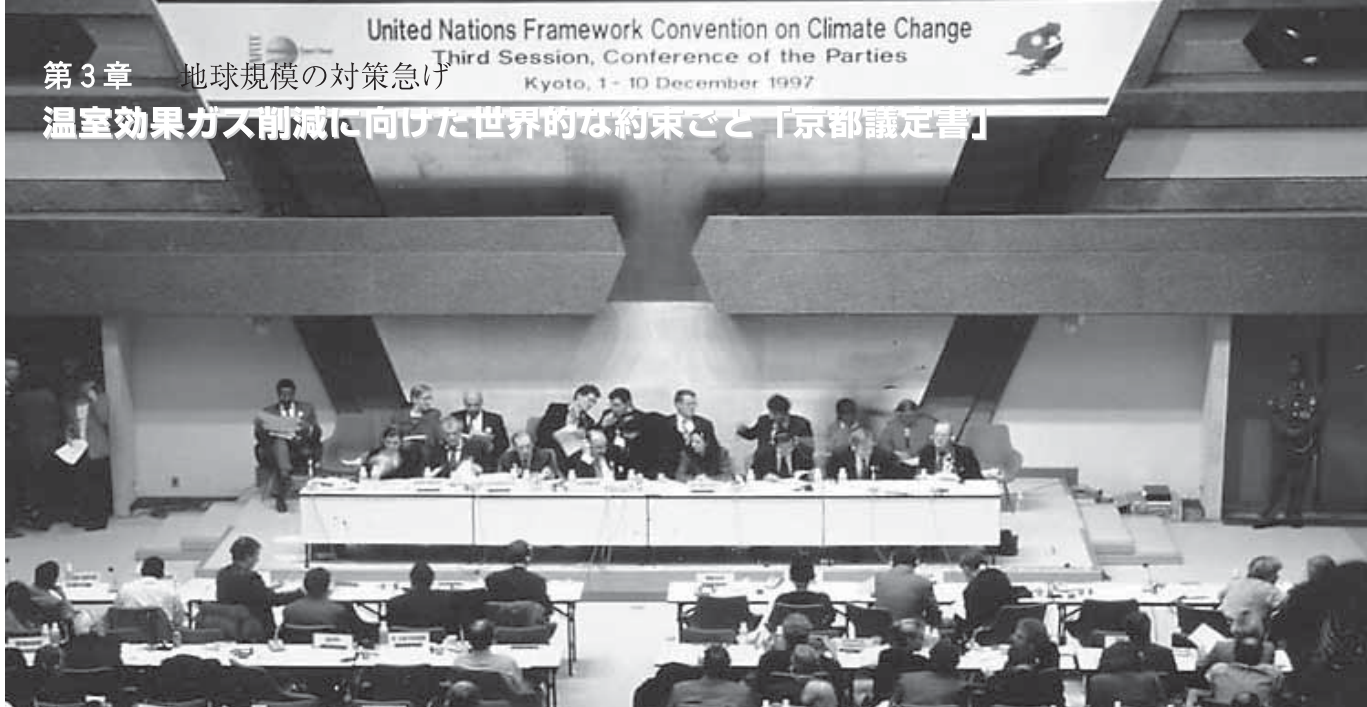


温室効果ガス削減に向けた世界的な約束ごと「京都議定書」



第3回条約締約国会議（COP3・地球温暖化防止京都会議）本会議場 photo 気候ネットワーク

— 温暖化は歓迎すべき現象？

19世紀末にスウェーデンの科学者スバンテ・アレニウスが、将来の地球をより住みやすくする歓迎すべき現象として、人為的な地球の温暖化の可能性があると初めて指摘しました。

しかし、この地球温暖化は1980年代に入ると、次第に科学者の間で地球環境への大きな脅威として問題視されるようになります。そして1985年、国連環境計画（UNEP）などの主催でフィラハ会議がオーストリアで開催され、参加していた科学者の呼びかけにより、国際的に温暖化対策を進める活動が必要だという合意ができました。この流れを受けて、1988年にIPCC（気候変動に関する政府間パネル）が誕生しました。

同時に地球温暖化問題は、急速に国際的な問題、すなわち政治的な問題として捉えられるようになりまし。1988年、先進国首脳会議（G7）閉会直後に開催されたトロント会議には40数カ国から300人以上の気候研究者、法律家、政府関係者などが参加し「2005年ま

第3章 地球規模の対策急げ

温室効果ガス排出削減に向けた世界的な約束ごと「京都議定書」

1990年代に入り、地球温暖化が人類をはじめとする生物界全体に深刻な問題をもたらすことが指摘されはじめました。そして国際的に温暖化対策を進める何らかの活動が必要だという合意のもと、世界の科学者で構成されるIPCC（気候変動に関する政府間パネル）は誕生しました。科学者の間で生まれた地球温暖化に対する関心は、やがて政治的問題へと変化していきました。

でCO₂排出量を1988年レベルから20%削減」という具体的な数値目標を示した声明を採択しました。こうして科学者の間で生まれた地球温暖化に対する関心は、政治的問題へと変化していきました。

— 気候変動枠組条約の締結

1992年5月にニューヨークで開催された第5回気候変動枠組条約に関する政府間交渉委員会（IPCC）の再開会合で、地球温暖化

防止を目的とした国際的な取り組みを初めて定めた条約「気候変動枠組条約」が合意されました。この条約の究極の目的は、「温暖化防止のため大気中の温室効果ガス濃度を安定化させること」です。

そして、その直後の6月にブラジルのリオデジャネイロで開催された地球サミット（環境と開発に関する国連会議）で各国の署名が開始されました。

気候変動枠組条約には「予防原則」と「共通だが差異ある責

任」という2つの大切な考え方をはじめとする5つの原則が採り入れられました。

条約は150カ国以上の署名をもって1994年3月に発効し、2001年12月11日現在で日本を含む186カ国が加わっています。

- 予防原則**
重大かつ不可逆的な影響がある問題については、たとえその環境破壊の現象が不確実なものであってもあらかじめ対策を講ずるべきという考え方
- 共通だが差異ある責任**
温暖化問題に対しては世界共通の責任があるが、各国の責任の度合いと対処能力には差があるという考え方

— COP3と京都議定書

1997年12月、京都で第3回目の条約締約国会議（COP3・地球温暖化防止京都会議）が開かれ、日本は開催国として議長を務めました。

温暖化問題は人類の生活や経済活動に密接に関係しているため、会議では各国の利害が対立し難航しましたが、様々な交渉を経て、最終的にはそれぞれの利害を乗り越え、温暖化を防止するという人類共通の目的のもと、先進国における温室効果ガス排出削減目標などを定めた「京都議定書」が採択されました。

京都議定書は、世界のほぼすべての国が温暖化防止のために具体的な対策を実施し、長期的な温暖化対策の第一歩を踏み出すことに合意した国際条約です。産業革命以後、増加の一途を辿っていたCO₂をはじめとする温室効果ガスに関して、まずは先進国に限るものの、人類史上初めて削減に向かうことを目的とした画期的な合意文書です。

また、初めて日本の都市の名を冠した国際多国間条約であるという意味でも記念すべきものとなりました。

この議定書には、先進国が6つの温室効果ガスを「いつまで

に「どれだけ」削減するという数値目標や、他の国と協力して目標を達成できる仕組み、森林など植物が光合成によって吸収する量を排出削減の算出に含めること、議定書の約束を守らせるための仕組みなどが盛り込まれました。

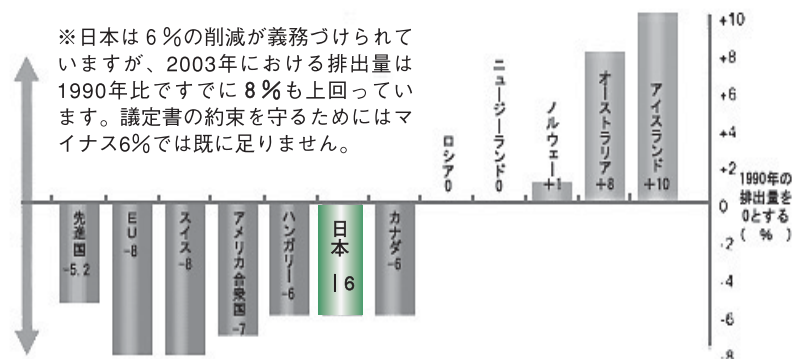
— 各国の削減目標

京都議定書では、先進国の温室効果ガス排出量について法的拘束力のある数値目標が定められました。温室効果ガスには色々ありますが、京都議定書ではその内、CO₂、メタン、一酸化二窒素、HFC、PFC、SF₆の6つのガスが削減対象となりました。（詳細は6ページ下参照）

目標は、先進国全体で6つの温室効果ガスの排出を2008年から2012年の間（第一約束期間）に、1990年と比較して5.2%削減するというものです。また、数値目標は各国ごとに差がつけられ、日本では6%の削減が課せられました。

※京都議定書は、温暖化対策の具体的な一歩を踏み出した画期的な国際条約ですが、CO₂最大排出国のアメリカが2001年に離脱、また急速な経済発展を遂げる中国には削減義務がないなどの問題点もあります。2005年2月発効。

京都議定書で掲げた各国別の温室効果ガス削減目標



京都議定書の概要

対象ガス	CO ₂ 、メタン、一酸化二窒素、HFC、PFC、SF ₆
削減基準年	1990年（HFC・PFC・SF ₆ については1995年）
目標達成期間	2008年から2012年の5年間（第一約束期間）
削減目標	先進国全体で5.2%削減（日本は6%削減）